墓参

上杉　辰

私は身体をこわし、急遽入院大手商社の取締を勇退してから一年間の治療の後、退院し年老いた母との長年の約束をやっと実現し、戦死した父の墓参をするため、成田空港発午前九時三十分の飛行機に乗り、私達は今、マニラに向かっている。隣の席に座る母はずっと目を瞑り、収支無言を通し、物思いに耽っている。何も語らぬ母の胸中を計り知る術はない。私達だけではない。機内には悲喜こもごもの人生を送る人達が乗り合わせているのだ。同じ目的地へ向かっている、さまざまな心模様を描く、一つの箱の中の人達。そんなことを考えなら一人ビールを飲んだり、食事をしたり、機内販売や観光案内のガイドブックを見たり、気儘に過ごしていると、時の過ぎるのは思いのほか早い。いつの間にか四時間が過ぎ、シートベルト着用のアナウンスが流れ、そして間もなく、マニラ空港に到着した。

入国手続きを済ませ、預けた荷物を受け取りロビーへ向かうと、私達の名前を書いたプラカードを手にしてた女性ガイドの姿が、十メートルほど先に見える。彼女に近づき、挨拶を交わしタクシーに乗ると、午後二時出港の船に乗るためにマニラ港の船着場へと向かった。そこから、日米の決戦場となって父が戦死したコレヒドール島へ渡るのだ。

この島はマニラ湾の入口に位置し、三百年以上に亘り、スペイン、アメリカ、日本の代々の統治下で、マニラ防衛のための重要な要塞となっていた。太平洋戦争においては、マニラを死守して米軍の日本本土攻撃を食い止めるための、日本軍の最も大事な最後の砦でもあった。

到着すると高速船に乗り間もなく出発、穏やかな鏡のような海を滑る様に一時間ほど進み、到着となった。待っていたバスに乗り、人気のない、不気味なほど静まり返った港を進む。車の窓から外を見ると、立ち並ぶ鉄筋コンクリートの建物は全て蜂の巣状態で、戦争の激しさを物語っていた。

しばらくするとバスが止まり、そこからはガイドの案内で歩いて見物することになった。ここへ到着するまでは、タクシー、高速船、バスと乗り継いできたが、乗り物の中はクーラーが効いていたので暑さは感じなかったが、外へ出て数十メートル程歩くと南国の強い直射日光と海からの照り返しが加わり、暑いというより痛さを感じ、汗が噴き出した。私達は逃げるようにして土産品屋に入った。その店の真正面の壁には、日本の若手将校が日本刀を天に振りかざし勝利の雄叫びをあげている勇ましいパネル写真と、進軍する日本兵の勇姿を写したパネール写真が飾ってある。今の日本では考えられない事だが、戦争での勝利を目的として戦った時代があったのだ。善し悪しは別として、昔の日本には、国の挙げた目的に向かい国民が一体となり、若者が命懸けで戦った時代があったのだ。今の自由で恵まれた生活をしている私は、申し訳ないような気持ちになり、胸がしめつけられた。じっと耳を澄ますと、何処からともなく、亡くなられた英霊の、憂国、立国の魂を秘めた叫び声が、暖かい南の風に乗り、私の心に入り込んで離れない。

この小さな島は、マッカーサー司令官率いる米軍の猛攻撃を受けた。戦いに敗れ、最後まで生き残った人達も爆薬を抱えて玉砕し、一万五千人もの尊い命が散った島でもある。こんな時代もあったのだと、つくづくこの平和な時代を思いやった。そして私を含め、日本国民一人一人が平和の意味について、改めて考えなければならないと思った。

民主主義とは…、軍国主義とは…と、現在の私の生き方とも比べ、複雑な思いがした。愛国心を持って、敵と、そして飢えとマラリアとも命懸けで戦った若者。政治の無力、国家の権力の存在というものを、この地は、はっきりと顕現しているのだった。

愛国心が戦争に繋がるのはよくないが、今の政治家に、真に国を、国民を思う愛国心があるのだろうか、と深い疑問を感じた。自我自尊、私利私欲で、信念のない場当たり的政治を続け、国の財政を借金漬けにし、何の反省も責任も感じない。戦死し平和をの礎となった兵士や、敗戦後、国家の再建と繁栄をもたらした先人に学ぼうという気もないし、努力もしない、なんたることだ。国民を騙すことに終始し、国民の税金を食い物にして、己の栄達のみを考え、死んでしまえば墓の中、後で何を言おうが聞こえない。先がどうなろうと、今を楽しくのんきに過ごす、それでいいのだろうか。そんな人に投票した我々にも、選挙に参加しない人にも責任がある。

無欲で見識と強い責任感の有る人に立候補して頂き一刻も早く国家、国民、平和のために一命を捧げるような、立派な政治家が出現することを望みたいものだ。思いはあてどなく広がる。

今回、この地を訪れた最大の目的は、父の眠る日本人戦没者合同慰霊碑に、母と二人で、手を合わせ、父の冥福を祈ることだ。

慰霊碑の前に立つと母は跪き、しっかり前を見つめて何回も頭を下げ、

「お父さん、遅くなって申し訳ありませんでした。私はお国の為、一命を捧げたあなたのことを一日たりとも忘れたことはありません。あなたが死んで残してくれた軍人恩給のお陰で、二人の子供を立派に育てることができました。本当にありがとうございました」

はっきりした言葉で何回も語りかけ、長い間手を合わせた後泣き崩れた。そして思う存分泣いた後、立ちあがって、

「お前のお陰でお父さんに会いに来ることができ、いつ死んでも、もう思い残すことや心残りもない。ありがとう」

と清々しい顔で私に抱きついた。その時、私は母が再婚しなかった理由が分かったような気がした。私は親孝行ができたという思いで、言葉にならない深い喜びを感じる一方で、父は私が母のお腹の中にいたことを知っていたのだろうか、どんな気持ちで死んでいったのだろうかと、切ない気持ちも湧いてきた。

父の墓参りを終え、ああ、長年の念願が叶えられたという安堵感の中、私達は夕暮れのコレヒドール島を後にした。帰りは、出港した時の穏やかな海が嘘のように、荒波は波しぶきを吹き上げて、船体に体当たりして荒れ狂っている。一年を通して比較的穏やかな奥駿河湾の海を故里に持つ私達親子なので、出発した時と違う、一変した様相に目を見張り、驚くばかりだった。

おだやかな南の海の姿と、その姿を変え激しく波立つ海。今の日本人にとって、戦争はすでに過ぎ去った遠い過去の出来事になっているが、コレヒドール島のような惨事が再び繰り返されない保証はどこにもない。この地を訪れ、現在の日本の平和を、いつまでも守り続けてほしい、守り続けなければならないと言う思いが新たに生まれた。それと同時に、世界中で起こっている紛争も円満に解決され、平和の訪れる日が、一刻も早く来てほしいと願うのだった。

一泊二日という、忙しく短い海外への旅だったが、母との長年の約束、願い

が叶えられた最高に良い旅だった。それは、私にとっても多くの教順を授けていただき、命ある限り絶対に忘れられない母との思い出となった。

上杉　辰